

握り潰した重要情報の代償（広島と長崎、更に北方四島と南樺太）

第二次世界大戦の混迷のなか、日本には「伝えること」の意味を深く背負った一人の情報将校がいた。陸軍少将・小野寺信。彼は欧州の最前線から、幾度となく本国に警鐘を打電し続けた。

1940年、フランスがドイツに降伏し、日独伊三国同盟が結ばれる。翌年には独ソ戦が始まった。刻々と変化する欧州情勢のなか、ベルリンの日本大使館が伝えるのは、ドイツ発表の表面的な情報に留まり、日本政府は戦局の実像に触れることが困難だった。

ヒトラーはイギリス上陸を目的に制空権の奪取を試みたが、イギリスはレーダーを駆使してこれに對抗した。これが、1940年7月10日から10月31日までイギリス南部上空とドーバー海峡周辺で繰り返された「Battle of Britain」(史上最大級の航空戦)である。この戦闘でドイツ空軍の戦闘能力は低下し、ヒトラーはイギリス上陸を断念。

イギリス侵攻に備えて集結していた陸軍部隊や装甲師団は、夏季の短期決戦を想定した夏装備のまま東部戦線(対ソ連)へと転用された。日本が南方作戦(真珠湾攻撃を含む)を開始する頃には、ドイツはモスクワ攻防戦で甚大な損害を被っていた。

その要因は、零下30度以下の冬と、日本国内で暗躍したスパイ(ゾルゲ)による「日本は対ソ戦の意思なし」との報告により、極東の兵力を大幅にモスクワ攻防戦へ転用した結果である。

その中で、小野寺はスウェーデン・ストックホルムの駐在武官として独自の情報網を築き、バルト諸国やポーランド亡命政府と連携しながら、欧州戦線の核心に触れ

る情報を収集し続けた。彼は一貫して「日米開戦は絶対に避けるべき」と訴え、30回を超える「日米開戦絶対不可ナリ」との打電を本国に送った。しかし、大本営は南方作戦の遂行を優先し、彼の警告は沈黙のうちに葬られた。

戦争終結が近づいた1945年、小野寺はさらに重大な報告を行う。ソ連がドイツ降伏の三か月後に対日参戦するという密約——ヤルタ会談の影である。

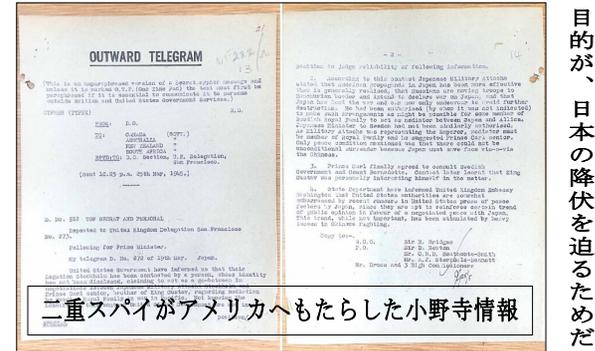
だが日本政府はなお、日ソ中立条約の効力を信じ、ソ連を和平の仲介者として期待し続けた。その裏で、アメリカは南樺太と千島列島の領有を黙認する密約のもと、ソ連に艦船149隻を無償供与し、極秘裏に対日戦訓練を施す「プロジェクト・フラ(Project Hula)」を進めていた。それは冷戦の気配を孕んでいた。

「即ち」未来の前哨戦を、日本の北辺に築く作戦でもあった。ルーズベルトの死去により後任となったトルーマン大統領は、ポツダム会談出発直前、この密約の存在を知らされる(小野寺の報告は二重スパイによってカナダ経由でアメリカにもたらされた)。そして8月6日、広島に原爆が投下され、8日にはソ連が対日参戦、9日には長崎に原爆が投下された。

この原爆投下についても、小野寺少将を含む一部の日本軍関係者が、事前にその情報に触れていた可能性は否定できない。そして8月18日、ソ連軍は占守島への侵攻を開始する。

後に、トルーマン大統領の専属カメラマンだった故・ジョー・オダネル氏(代表作『焼き場に立つ少年』)が、原爆投下直後の広島・

長崎の写真をトルーマンに見せて、「如何思うか」と訊いた。トルーマンは、吐き捨てるように答えた。「ルーズベルトに訊け。」この一言に、彼が抱えていた葛藤と責任の所在、そして冷戦の気配を感じる。もし原爆投下の真の目的が、日本の降伏を迫るためだ



二重スパイがアメリカへもたらした小野寺情報

けでなく、ソ連の進出を阻み、戦後の勢力地図を描くための「戦略的加速装置」であったとするならば、小野寺少将の警告を黙殺した代償は、あまりにも重い。事実、それは2回の原爆投下と、北方領土の帰属問題に直結している。もし大統領がルーズベルトのま

までであったならば、北海道北部——留萌市と釧路市を結ぶ線以北——の割譲どころか、新瀉以北の領土さえ要求され、日本は南北に分断された国家となっていた可能性すら否定できない。日本国の領土は、現在でも不法に占拠されたままである。北



当初の日本分割占領案

故・ジョー・オダネル氏、【焼き場に立つ少年】を語る

長崎では、次から次へと死体を運ぶ荷車が焼き場に向かっていった。焼き場となっていた川岸には、浅い穴が掘られ、水がひたひたと寄せており、灰や木片や石灰が散らばっている。(中略)。焼き場に10歳ぐらいの少年がやってきた。小さい体はやせ細り、ポロポロの服を着て、裸足だった。少年の背中には2歳にもならない幼い男の子がくくりつけられていた。その子はまるで眠っているように、見たところ体のどこにも火傷

の跡は見当たらない。少年は焼き場のふちまで進むと、そこで立ち止まる。わき上がる熱風にも動じない。係員は背中の幼児を下ろし、足元の燃えさかる火の上に乗せた。まもなく脂の焼ける音がジュウと私の耳にも届く。炎は勢いよく燃え上がり、立ち尽くす少年の顔を赤く染めた。気落ちしたかのよう

に背が丸くなった少年はまたすぐに背筋を伸ばす。少年は気を付けた。一度も焼かれる弟に目を落とすことはない。軍人も顔負けの見事な直立不動の姿勢で、彼は弟を見送ったのだ。私はカメラのファインダーを通じて、涙も出ないほどの悲しみに打ちひしがれた顔を見守った。

私は彼の肩を抱いてやりたかった。しかし、声をかけることもできないまま、もう一度シャッターを切った。急に彼は回れ右をすると、背筋をピンと張り、まっすぐ前をみて歩み去った。一度もうしろを振り向かないまま。係員によると、少年の弟は夜に死んでしまったのだという。(中略)今日一日みた人の少年はどこへ行き、そうしてどうして生きていくのだろうか。

原爆投下。実態は1945年8月6日午前3時、日本陸軍特殊情報部は、テニアン島から発信されたV600番台のコールサイン(エノラ・ゲイ)の無電「我ら目標に進行中」を傍受。しかし、この情報は広島島の軍司令に届かず、午前8時15分に無防備な広島へウラン型原子爆弾「リトルボーイ」が投下された。

一方、ある元海軍戦闘機搭乗員の孫による証言では、「祖父は紫電改で四国上空のB-29に接敵したが、機関砲が作動しなかった」という。9時44分、B-29(ボックスカー)は小倉陸軍造兵廠上空に到達したが、視界不良のため目標確認が出来なかった。それは、八幡製鐵所がコールターを燃焼させて黒煙を発生させ煙幕を張った。この煙幕が西風に乘って小倉方面へ流れ、ボックスカーの目視照準を妨げた。当該機は3度爆撃航程を試みたが、午前10時30分頃に小倉上空を離脱。第2目標の長崎へと転進したが、長崎市は雲に覆われ、午前11時2分、僅かな雲の隙間から見えた爆撃目標ではない松山町に、プルトニウム型原子爆弾「ファットマン」を投下した。本来この状況では、原爆を洋上投棄し沖繩へ向える命令だった

